

25. 腎感染症の腎イメージについて

柳沢 宗利 町田 豊平
三木 誠 大石 幸彦
上田 正山 木戸 晃
(慈恵医大・泌)

われわれは、今までに各種腎感染症における腎シンチグラフィの形態および機能診断法としての価値について報告してきた。今回、腎結核、慢性腎盂腎炎、腎膿瘍など泌尿器科領域の代表的腎感染症において得られる腎イメージについて疾患特異性の有無、IVP所見との対比について再検討し、若干の知見を得たので報告する。

IVPと対比出来た腎結核症例90例について、Lattimerの分類と腎イメージのtypeにより分類し検討した。中病巣では、IVPより腎イメージで腎実質変化がよりよく描出され、大病巣では、IVP所見とかなり一致するが実質については腎イメージのほうが機能部の有無をより忠実に描出すると思われた。病巣の進行につれ腎イメージで、帯状欠損像、辺縁欠損像、ついで広範囲の欠損像、欠損像中の不整なuptakeなどが特長と思われた。こうした腎イメージ上の変化は腎結核の進行過程とその病態を考えればある程度理解出来る。

IVPと対比出来た慢性腎盂腎炎29例について、grade分類し検討した。IVPで変化の認められなかった6例中4例に腎シンチグラムで変化を認め、進行例では、腎イメージの倭小化の割に実質のuptakeが多いことが特長であると思われた。これらから慢性腎盂腎炎の実質診断における腎イメージングの有用性を確認した。

腎膿瘍例については、正常な腎イメージの中の円形欠損像が特長と考えた。

以上、腎感染症における腎イメージの特長をIVP所見と対比検討した。もちろん腎イメージだけから疾病を診断することは出来ないが、各々の疾病の腎イメージの特徴を知ることは臨床的に有用と考え報告した。

26. 骨シンチグラムで腫瘍内集積を見た肝芽腫の

1例

鎌形正一郎 猪原 則行
伊藤 泰雄 重城 明男
石田 治雄 井上 迪彦
大森 一彦 伊藤 雅夫

(都立清瀬小児病院)

石井 勝己

(北里大・医・放)

従来われわれは、腫瘍患者に対する術前検査として、骨シンチグラムと、 ^{67}Ga -citrateによるシンチグラムをRoutineに行なっている。腫瘍内に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ リン酸化合物が取込まれた例として、Neuroblastomaをすでに本学会において報告した。今回、Hepatoblastoma内に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ リン酸化合物が取込まれた例を経験したので報告する。患児は10ヶ月の男子で、6カ月より、Hepatosplenomegalyを指摘され、9カ月になり腹部膨満強くなり、本院に紹介された。右腹部に巨大な腫瘍を触れ、同部の $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -phytateによる肝シンチグラムでは、cold areaを示し、また ^{67}Ga シンチグラムでは強い集積を認めた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDPによる骨シンチグラムでは、肋骨・脊椎への転移を疑わせる集積像と、右腹部腫瘍に一致した部位への異常集積像が認められた。血管造影では、主に右肝動脈より栄養される悪性腫瘍と考えられたため、他の検査所見と併せHepatoblastomaの診断をし、手術施行した。病理組織では石灰化は見られなかった。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ リン酸化合物が、骨以外の組織に取込まれた例は、現在までにいくつか報告されているが、これらは何れも、Caならびに、Pの代謝亢進によるものと考えられている。しかしながらHepatoblastomaの報告は、われわれの調べ得た範囲ではなく、本例が第1例目と思われる。Hepatoblastomaでも、約20%に単純レ線石灰化がみられることから、恐らく同様の機転が生じていたために、集積像が見られたものと推察された。